

明治・大正期における住友の金融業・倉庫業・不動産業

－「担保関連事業」の経営史的分析－

佐藤秀昭

本稿は、明治・大正期における住友の金融業・倉庫業・不動産業の多角化・成長の端緒を、明治期前半に住友本店が営んでいた三種類の金融業に求め、その展開を「担保関連事業」という観点から描き出すものである。本稿では、当該期における住友が、事業部門とは独立した本社部門の一貫した資金的統括を機軸として、「担保」という経済的根拠を媒介に、金融業・倉庫業・不動産業の初期における多角化と成長を有機的な関連のもとで達成したことが示される。本稿は、以下の6つの章および結語によって構成される。

第1章では、まず、日本財閥史研究の進展がファミリービジネス論・企業の経済学・内部資本市場論との関連で捉え直され、本稿の課題と方法が示される。そのうえで、その課題に答える本稿の主張の要約が示される。特に、住友における金融業・倉庫業・不動産業は、担保を「経済的根拠」にして有機的な関連をもった多角化と初期の成長が達成された事業であるという意味で、「担保関連事業」と総称すべき事業であったことが示される。

第2章では、明治期前半における住友本店が、三種類の金融業を営んでいたことが示される。まず、貸付担保を基準に、住友の営んでいた金融業が動産担保金融・不動産担保金融・無担保金融の三種類に分類される。続いて、各種帳簿に即して、それら三種類の金融業を所管した諸部署（会計方・並合方・田地方）が特定される。さらに本章では部署別の貸付先を特定することによって、住友本店内では明治期前半において担保関連事業を担う部署と、住友全体の資金的統括を担う部署が分化したことが示される。

第3章では、住友における金融業（並合業・銀行業）への多角化とその初期における成長が、担保を経済的根拠にして達成されたことが示される。まず、住友が営んでいた動産担保金融のうち、並合方が担当した貸付の貸付先・貸付担保が明らかにされる。また、貸付先・貸付担保を基準に、住友の並合方と質屋が比較され、住友の動産担保金融は質屋ではなく並合業と呼ばれる金融業であったことが示される。そして、並合業から銀行業へ貸付残高が引き継がれたことが示され、住友における銀行業への多角化は担保関連事業である並合業に由来していたことが示される。

第4章では、住友における倉庫業への多角化とその初期における成長が、担保を経済的根拠にして、金融業と有機的な関連を持ちながら達成されたことが示される。まず、住友の倉庫業が担保関連事業であったこと、すなわち、単なる預り貨物の保管のための倉庫というよりはむしろ、金融業の貸付担保を保管するための倉庫としての性格が強かったことが示される。そのうえで、金融業の貸付担保を保管するための倉庫の需要が、有価証券担保金融の高まりとともに低下していったことを示され、住友倉庫はその成長の行き詰まりを打破するために、保税倉庫業に参入したことが示される。住友は、大正14年末に年間入庫額で測って日本最大の保税倉庫を有するに至ったことが示される。

第5章では、住友における不動産業の初期における成長が、担保を経済的根拠にして、金融業・倉庫業と有機的な関連を持ちながら達成されたことが示される。まず、明治期前半における住友の不動産業が、不動産担保金融の質流れによってその土地集積を半ば受動的に進めたことが示される。そのうえで、明治期末における住友の所有地が土地単価の高い順に示され、住友は明治期後半以降、大阪市中心部の土地を換地などの方法によって積極的に集積していたことが示される。また、同じく明治期後半以降、住友の不動産業はそれらの土地を住友の銀行業・倉庫業・金属工業（鋳鋼場・伸銅場）の本店・支店用地や工業用地・倉庫用地ために譲渡していたことが示される。

第6章では、住友では会計方の流れを汲む本社部門によって、一貫した資金的統括が行われていたことが示される。まず、明治期前半に主として無担保金融を担った会計方が、上記の担保関連事業とは独立した部署のなかで住友全体の資金調達・資金調節を担っていたことが、具体的な経路・方法とともに示される。さらに、本社部門は、大正期の半ばには住友銀行にその一部の機能を委譲しながらも、新しく作成した諸表によって住友全体の資金調達・資金調節の状況を一覧し続けることに努め、住友銀行からの借入金についてその極度額・極度率を遵守しつつ、その枠内で資金効率・利益率を最大限に高めようとする姿勢をほとんど一貫してつらぬきとおしたことが示される。

結語では以上の分析結果がまとめられたうえで、本稿の示唆が示される。すなわち、住友では、会計方の流れを汲む本社部門の一貫した資金的統括を機軸として、担保金融を契機とした「担保関連事業」の展開を経験し、これをもって戦間期以降の飛躍の歴史的前提としたことが示唆される。また、担保は、これを受け入れる主体に対して、空間的・人間的な経営資源を割くように促す機能を持つことがあったことが強調され、本稿は、そのような担保の働きが企業の経営を変化させた事例として、明治・大正期における住友の経験を明らかにしたものと位置づけることもできることが示される。担保を媒介とした企業行動の変化が、結果として市場経済に影響を与えることとなった事例を集めることで描かれる新しい歴史像、すなわち、「担保からみた経営史・経済史」とでも総称されるような分野の萌芽の一里塚として、本稿が位置づけられる可能性が示される。